ふるさと浪漫

葛城⑪

第63回

ふるさと浪漫では「葛城⑦・⑧」で〈昨(2010)年11月25日に〈4世紀の権力者の祭祀場か、奈良県・秋津遺跡に大型建物群〉(朝日新聞)と報道され、秋津遺跡と名付けられた遺跡を訪ねてまいりました。ところが、昨(2011)年11月9日には、秋津遺跡のすぐ西側の中西遺跡で弥生時代前期の国内最大規模の水田跡が発掘されたと報道されました。やはり、葛城は考古学的にも目を離せない土地のようです。さっそく、中西遺跡を訪ねてみましょう。

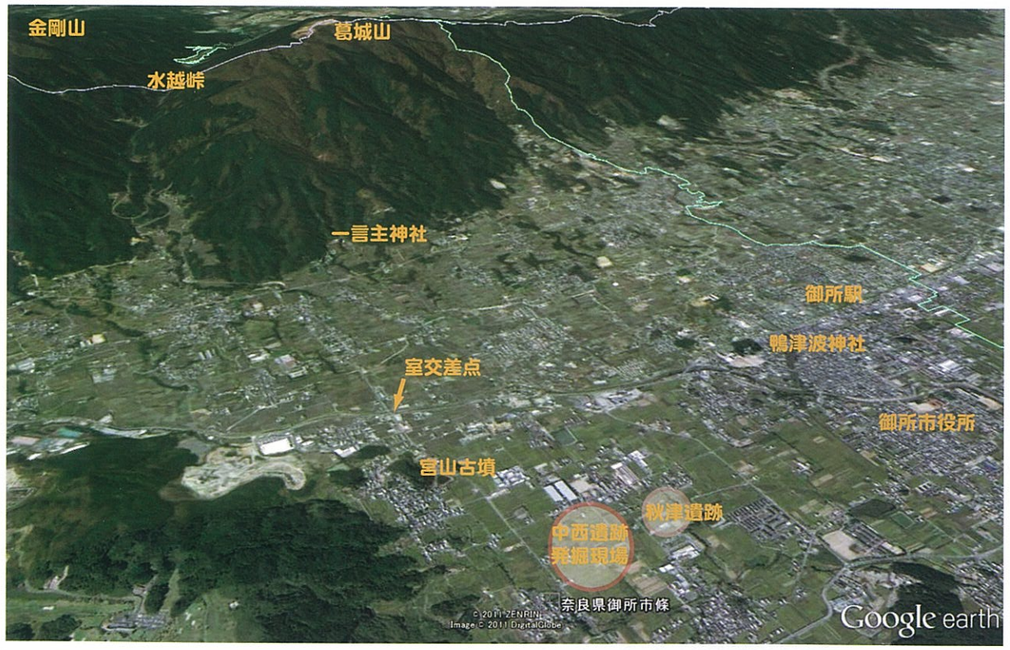
朝日新聞によると、〈昨年11月8日、奈良県御所市條(ジョウ)にある中西遺跡で弥生時代前期(約2400年前)の水田跡が確認されたと県立橿原考古学研究所が発表した〉と報道していました。これまでに発掘された同時代の水田跡地としては、滋賀県守山市の服部遺跡で約18,700㎡、大阪府八尾市から東大阪市にかけて広がる池島・福万寺遺跡で約18,000㎡の遺跡が見つかっていますが、今回の発掘はそれらを上回る我が国最大となる約20,000㎡の広さであり、稲作が始まった初期の時期に(発掘された部分だけで…)約2,000枚の水田が整然と並んでおり、〈高い計画性と労働力を持った集団の存在をうかがわせる〉ものであるとのことでした。

この発掘は、京奈和自動車道(京都市を起点とし奈良県を北から西に抜けて和歌山市へと続く全長約120㎞の高速道路)の建設工事に伴うもので、この辺りは御所インターチェンジが建設される予定地とのことです。この場所の南西には葛城襲津彦(ソツヒコ)の墓と伝える宮山古墳があり、古代初期(西暦400年頃と推定)の大豪族葛城氏の本拠地にも近く、「葛城⑦」でも訪ねました縄文時代から古墳時代にかけての複合集落遺跡の秋津遺跡にも隣接しており、古代葛城でも中枢を占める場所なのです。京奈和自動車道建設工事に伴う〈平成21年からの調査で(未調査の区域は残っているが…)、すでに水田跡約7,000㎡が出土し、平成23年4月からの調査で新たに約13,000㎡が確認されたものである。水田1枚の大きさは縦3m、横4mほどであり、東西方向に複数の長いあぜを造った後、南北方向のあぜで細かく分けていったと見られ、弥生時代前期の土器を含む洪水砂の中に埋まっていた〉とのことです。

11月12日の現地説明会の資料によれば、この広大な中西遺跡の水田遺構について、〈今回の調査で確認した水田遺構は弥生前期(約2,400年前)へさかのぼると考えられ、検出した遺構には大畦畔・小畦畔・水路・島状高まりがあります。水田は高さ5㎝ほどの小畦畔で3m×4mの方形に区画し、それをいくつも連ねることで面的な耕地を造成する「小区画水田」と呼ばれるものです。区画の数は、実に850枚にもなります。このように、一つの水田を細かく区画するのは、より少ない労働力で水田に水をはるために必要な平坦面を造成するための工夫であると言われています…〉と水田遺構の構成について説明し、まとめとして〈…今回の調査では、調査区のほぼ全域にわたる約10,000㎡に及ぶ水田遺構を確認することができました。中西遺跡の調査では、第14・16次調査でも弥生時代前期の水田遺構が確認されており、周辺調査を合計すると耕地面積は約20,000㎡以上もの広がりを持つことが明らかになりました。これは弥生時代前期の水田としては、滋賀県服部遺跡、大阪府池島・福万寺遺跡などを越す規模であり、調査区周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられます。現時点ではこの水田を営んだ人々が居住した集落が確認されておらず、まだまだ解明しなければならない課題も多く残されていると言えるでしょう。しかし、大和はのちの古代国家成立の地であり、その成立の背景の一つとして、早くから稲作を中心とする安定的な経済基盤を構築することができたという社会的・経済的環境が寄与した可能性が高いと考えられます〉と解説されていました。

中西遺跡発掘現場
(3m×4mで区画された水田の様子がわかります)
※奈良県立橿原考古学研究所の許可を得て掲載しています。

ふるさと浪漫で「葛城⑦・⑧」で訪ねた秋津遺跡、一言主神社、宮山古墳、鴨津波神社等との位置関係を見てください／Google earthより抜粋)



中西遺跡周辺の地理的状況

参考文献

中西遺跡第18次調査～弥生時代前期水田の調査～

2011年11月12日　奈良県立橿原考古学研究所